遠藤周作賞
華井陸斗「夢のまた夢」

夢のまた夢

鶴川第二中学校　二年　　華井（はない）　陸斗（りくと）

二一ＸＸ年、町田に新たな市長が誕生した。彼は目標として様々なことを掲げた。例えば「町田市内で起こるすべての事件をなくす」や「町田に観光客がたくさん来るようにする」といったものだ。それらは市民たちにとって無謀以外の何物でもなかった。しかし、彼はそんな市民たちの反応をよそに世界中から有名な学者や教授を集め、大量の資金をつぎ込んだのだった。

そして就任から一年後、開発チームが発足した。

「君たちには私の理想を実現するためのある物の開発にご協力いただきたい。その名も『夢のまた夢まくら』だ！　その枕を使って寝ることで夢のまた夢と言われるような驚くべきことを夢で見て、それが実際に起こるような仕組みだ。我々は就任から一年程でこの現象の仕組みを調べ上げた。あとは製作するのみだ。」

「しかし市長、あとは製作するだけならば我々を使わなくてもいいじゃありませんか。自分たちの研究があるんですよ。」

「残念ながらこの仕組みは非常に難解で、とても我々の手には及ばなかったのだ。そこで君たちに協力してもらうことにしたんだ。もちろん出来上がった暁には君たちに莫大なお金を払おうと思うがね。」

その言葉で目の色が変わった学者や教授たちの協力によって、これまで難航していた製作作業は急速なスピードで進み、わずか３ヶ月で終わった。市長は手放しで喜んだが、すぐさま真剣な顔つきになり、

「これから早速私が寝てみようと思うよ。」

と言った。チラホラと文句は出たものの、結局市長が寝ることになった。大勢の人たちの前で市長は床に入った。

「では、おやすみなさい。私が起きたとき、町田がどうなっているか楽しみだね。」

市長は笑みをうかべると、すぐさま夢の世界へと入っていった。

その夢の中で市長はにわかには信じがたいものを見た。町田には超大型の商業施設が立ち並び、遊園地や動物園などもできていた。観光客とみられる人は大勢いて、町田は活気に満あふれていた。その様々を眺めていると、どこからともなく声が聞こえてきた。

「・・・ください。」「・・・ください。」

遠藤周作賞
華井陸斗「夢のまた夢」

「市長起きてください！」
「んん・・・。もうかい？　で、何が起こったのか？」
「何か起こったのか？どころじゃないですよ市長！　ついさっきから市内で超大型の建造物がいきなり、大量に作られ始めて、観光客も殺到しているんですよ！　すぐさま対応策を練りましょう！」

　その後も市長が夢を見るたびに、それが現実に起こった。犯罪が起こらない平穏な一日の夢を見たら、それから犯罪が全く起こらなくなった。政策がことごとく成功した夢を見たら、現実でも上手くいき、支持率はうなぎのぼりだった。

　その日の夜も市長は例の枕を使って寝ていたのだが、酷くうなされていた。市長は、町田にＵＦＯが現れ、誘拐されるという夢を見ていたのだ。もちろんあの枕を使っているのだから現実に…

　その後の市長の行方を知っている者は誰もいなかった。

審査員講評

****

夢が実現する枕がある、しかし見る夢はコントロールできないというアイデアが面白かったですし、舞台が町田だったのも話をユニークにしていると思いました。最後の UFO の展開も突拍子もないところが逆に夢っぽく感じられて、楽しく読ませていただきました。

―― KEN THE 390